

『狂犬の恋情』

著: 榊 花月

ill: 北沢きょう

月寄りの後、そのままベントで送られ、深夜、鷹森は帰宅した。

自宅は湾岸に建つ、高層マンションである。その最上階の全フロアが、鷹森のプライベートな空間だ。同じフロアの別の部屋には、護衛役の若衆がつねに誰かしら寝起きしている。槇野の配慮だが、庇護される感覚にはどうもなじめそうにない。一家名乗りをした以上、身边は常時に警戒していなければならない、という主張は納得できないものではないが。

エントランスに足を踏み入れた時、宅配使用のロッカーの陰で人影が動いた。背後に従った若い二人が、さっと緊張したのがわかる。

だが、現れた男を見て、

「——なんでもない。知りあいだ」

鷹森は、二人を先に行かせた。

希有は彼らのことなどいないもののように無視している。視線は、ずっと鷹森に向けたままだ。激しい怒りを満面に湛(た)えたその顔のあちこちに、痣(あざ)や擦(す)り傷ができているのを見て、予想していたとはいえ、心が痛む。

「二度と会わないんじゃないのか」

希有は眉を上げる。

「……事情が変わった」

「そうか。よく、ここがわかったな」

名刺には、会社の住所と連絡先しか刷っていない。

「俺だって、そのくらいの情報は集められる。舐めんな」

希有の声は、不機嫌に低い。それでも、どこか純太と共通するものがあった、たとえばその響き。

「舐めちゃいないさ。俺に用事か。まず部屋に行こう」

パネルに暗証番号を打ちこみ、ロックを解除する。

「なんのつもりだよ」

希有の表情に、警戒の色が覗いた。しかし、鷹森がさっさとエレベーターホールへ向かうと、しかたなさそうについてくる。

エレベーターの中で、

「なんのつもりだ、とは？」

壁に凭(もた)れた希有に、はじめて返す。

じろりと横目で睨んでくると、

「しらじらしい」

吐き捨てた。

エレベーターが最上階に着いた。

ドアを開け、先に希有を通す。大理石の三(た)和(た)土(き)に、乱暴にスニーカーを脱ぎ捨てると、希有は肩を怒らせながら廊下に上がった。

リビングの灯(あかり)を点けると、無遠慮な視線を室内に巡らしながら、
「立派な部屋だな。どうせ汚い金で手に入れたんだろうが」

頬を歪ませる。

鷹森は苦笑した。

「まあ、ビジネスの中には、合法的でないものもあるだろうな」

だがそんなのは、なにも経済ヤクザの独(どく)壇(だん)場(じょう)というわけではない。
フロント企業舎弟なんていうのは、そこいらにいくらでも転がっている。表向きは、健全な普通の企業の顔で。

「は、なにが『合法的でないものもある』だ。しらじらしい」

また、そう言った。

「それで、きみの用事はなんだ？ なんのつもりだ、と言っていたようだが」

希有は立ったまま、今度は正面から睥睨してくる。純太より、少し背が高いかもしれない。

凶悪な光さえちらつかなければ、そっくりの顔。

「俺は、VJから外された」

「ほう」

鷹森は内心快(かい)哉(さい)を叫ぶが、希有はそれどころではないだろう。

「あんたが裏工作したせいだろ！」

「なぜ、そう思う」

「……チンピラが店で暴れた。マルテツの連中とは違う。そいつを店の裏に引きずりこんでぶん殴った。その次の日、今度は集団で来やがった」

「そいつらが、店をめちゃめちゃにでもしたのか」

「べつに、普通に坐って、静かに呑んでたよ。だが、あきらかにウチの客層じゃねえ。しかも、連中を監視するためなんだか、サツの連中まで入ってきやがる。だもんで、お得意さんがドン引いて、商売にならねえ。そんなことになったのは、おまえのせいだっ
て言われたから、ムカついて、メンバー全員片っ端から殴ってやった」

「名誉の負傷ってわけか」

鷹森の指摘に、思わずといったいで希有は顔を撫(な)でた。全員を殴ったということとは、全員から殴られたということでもあるはずだ。

「商売っていうのは、酒や音楽だけじゃないな」

長い眉がぴくりと動く。

「きみの言葉を借りれば、汚い金が動いているんだろう。たとえば、ドラッグの売買だとか」

「俺は、そんなのには関わってねえよ！」

希有は大声で遮った。鷹森は腕を組む。

「けっこうなことだ。純太の息子がヤバい商売に関わっているんなら、違うアプローチが必要になっただろうからな」

「——つまり、あんたが仕向けたって認めるんだな」

希有の目に、勝利の色が浮かぶ。しかし、鷹森にはそれに関してしらを切り続けるつもりはなかった。相手は純太の息子だ。その場しのぎの嘘で胡(ご)麻(ま)化(か)すようなことはしたくない。

「サツを畏れなければならぬような商売をしなければ、すむことだ。そういう連中と離

れられてよかったじゃないか」

「は？ あんたがそれを言う？ とぼけやがって！」

すごむ顔が、純太そっくりだと、そんな場合でもないだろうに鷹森は考える。純太の血が流れている、というだけで目の前の男を愛しく感じている。いつか止まる心臓。その時が今でも悔(く)いはないと思った。

「きみが失職したのは、たしかに俺のせいだろう。たいしたことはできないが、住むところなら用意するし、当面の生活も——」

「ふざけんな！」

希有は静かに話ができない人間であるようだ。それとも、相手が自分だから、こうまで突っかかってくるのか。

「俺に、あんたの世話になれと？ 馬鹿にしやがって！」

そして希有は、一步踏みこんでくる。殺気は感じたものの、鷹森は怯(ひる)まない。腕を乱暴に掴(つか)まれた。

「言ったよな？ 次に会ったら、犯してやるって」

「そんなニュアンスではなかったようだが——」

明るい場所で間近にすると、眸の中にある純太にはない黒々とした闇に気づく。八つで親に捨てられた子どもの、果てしない深(しん)淵(えん)。

「うるせえよ。俺のことは、俺が決めるんだ」

そのまま、床に引き倒された。負け知らずというのは事実なようで、押さえこまれた瞬間、腕力ではとうていかなわないことがわかる——それとも、もともと逃げる気もなかったのだろうか。

荒々しい手つきで、希有は鷹森の衣服を引き裂くように剥(は)ぎとっていく。シルクのシャツから、ボタンがいくつか弾け飛んだ。露わになった肌に、禽獣の爪(つめ)が食いこむ。雫(むし)りとりするような勢いで、胸の粒を引っ搔いた。

本文 p78～84 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>